

雷獸
木狗

史元劉郁西使錄曰骨篤犀大蛇之角也解諸毒未知然否曩日見紅毛蠻所畫一角圖乃海魚而有角
遠史國語解作槽柵犀曰千歲蛇角又爲篤納犀未知然否曩日見紅毛蠻所畫一角圖乃海魚而有角
前俯額上狀頗奇異姑記以備攻覽

〔玄同放言〕雷魚雷鷄雷鳥並異形雷獸圖

雷獸は今も目撃するものあらんその状小狗に類して灰色なり頭は長く喙半黒し尾は狐の如く利爪鷲の如しといへり雷震記に圖するもの信濃地名考に説くところ大抵相同じ又一説に首尾は獺に似て狀鼯鼠の如く尾と共に長サ三尺に過ぎず全體雜狐の如しといへり種類一同ならぬものにや越後名寄卷一 天象參補亦云安永中雷隕于村松城之士家而獲獸大如猫其形亦略相似矣其毛灰色而有光日中之後帶黃赤色如金腹毛逆生毛末有岐天晴則終日垂首如眠陰暗風雨之日則有可恐之勢矣此獸打傷足而不能升騰是以被獲焉瘡之後土人放之矣按蓋雷隕之處往往見此獸此獸在於三國嶺河内山中飯豐山之中雲下掩山中則乘之升騰而奔走雲中從雷霆隕地土俗名之謂雷獸といへりこれらは見聞のひとしからざるとおのゝ譬を取るのおなじからざるにもやあらん此に墜つるもの小狗の如く彼に獲らるゝもの獺の如く猫に似たらんはいよいよいふかかし深山の怪獸臆度をもて辨じがたし姑く異同を擧げて後勘の爲にす唐山にも獺といふ獸あり正字通上巴集獺字下云俗鼯鼠舊說引說文鼠形云々一名鼯鼠一名飛生といへり音鷄玉篇 音羸非これに由るときは鷗は和名むさびといふものなり玄かれども續字彙補巴集補音義云獺力追切音雷獸名其形似狸といへりかれば是國俗の所云雷獸の類なるものか亦その雷に従ひて昇降するや否をまらざるのみ又一種雷獸の首鏡に似たるものありそはある人の藏弄せる臨本にて見き寫真なりといへり又近ごろ越の後なる一友人より異形なる雷獸の畫圖一頁を獲たりその圖說に云元祿年間夏六月中旬越後國魚沼郡妻有つかりの近村伊勢平治村なる觀音堂の邊深田の中に陥りつゝ竟に斃れし雷獸ありけり當初袖の澤の里人豐與といふもの年十